

一八八三年九月九日(日)

ドツキネーショル

南神寺院でラタン、校長、その他の信者たちと共に

聖ラーマクリシユナの一つの想い、一つの言葉——神をつかまえる仕掛けが一番の**手品**マジック

聖ラーマクリシユナは、カーリー殿の馴染みの部屋で小寝台にお坐りになり、ニコニコ顔で信者たちと話をしていたらつしやる。お昼をすまされたところだ。時間は一時から二時の間。

今日は日曜日。キリスト暦一八八三年九月九日。バッドロ白分七日。部屋の床にはラカール、校長、ラタンが坐っている。ラームラル氏、ラーム・チャトジェー氏、ハズラー氏が時々入ってきては坐る。ラタンはジャドウ・マリツク氏の別荘の管理をしている。タクールを信仰して、時々、お目にかかりに来ていた。タクールは彼と話しておられる。ラタンはジャドウ・マリツクのカルカッタの邸内で、ニールアカンタの演ずる宗教劇が催されている話をしていた。

ラタン「どうぞお越し下さいまし。日も決まりましたので、そう申し上げるようにと主人から言われてまいりました」

聖ラーマクリシユナ「そりゃいいね。行くつもりでいるよ。アハ、ニールアカンタの燃えるような

信仰の歌！」

信者の一人「ほんとにそうですね」

聖ラーマクリシユナ「歌をうたいながら涙をポロポロこぼすんだ。ラタン、その夜は泊まろうと思ってるよ」

ラタン「それはありがたいことです」

ラーム・チャトジェーはじめ、何人もの信者たちがサンタルの盗難のことでラタンに聞いた。

ラタン「ジャドウ様のお邸で神様の金のサンタルが盗まれました……。いやもう、お屋敷中、上を下への大さわぎでございまして、^々皿動かし^々をして下手人^{げしゆにん}を見つけようとしております。皆が坐っている、盗んだ人の方に皿が動いて行くということ——」

聖ラーマクリシユナ「ハツハツハツ——どんな具合に皿が動くのかね？ ひとりでに動くのかい？」

ラタン「いえ、手で押さえているのでございます」

信者の一人「手に何か仕掛けがあるのです——怪しいマジックですよ」

聖ラーマクリシユナ「至聖^{かみ}さまをつかまえられる仕掛けを知っているのが、ほんとの賢^{かしこ}さだよ。一番の手品^{マジック}、手品^{マジック}！」

タントラの修行と聖ラーマクリシユナの^々子供^{こども}の態度^{だて}

話をしている最中に、数人のベンガル紳士が入ってきて、タクールにお辞儀をしてから席について

坐った。彼らの中の一人を、タクールは以前から知っておられた。この人たちはタントラ派の修行をしている。五種の秘行(パシマカウ)（五摩字）をである。タクールは何もかもお見透しなので、彼等の行いや考えはすべて覚わかつておられる。彼等のなかの一人が、宗教の名を借りて悪いことをしていることも聞いておられた。その人は、ある有名な兄弟の未亡人と道ならぬ愛情関係にあり、宗教の名のもとで彼女といっしょに五種の秘行をしている、ということもタクールはご存知であった。（訳註、五種の秘行五摩字——五つのM字を頭文字とする(1)酒マッヤ、(2)肉マッヤ、(3)魚マッヤ、(4)印契マッヤ、(5)交合を用いたタントラ行法）

聖ラーマクリシュナの場合は子供の態度をとられるのである。すべての女性をマーとお呼びになる。町の売春婦までもである。母なる神パガヴァティのひとつのお姿として見ておられるのだ！

聖ラーマクリシュナは笑いながらおっしゃった。

「アチャラーナンダはどこにいる？ いったったか、カーリーキンカールとシンギとかいう奴もここに来たが——。（校長たちに向かつて）アチャラーナンダや弟子たちと、わたしは態度が違うんだ。わたしは子供の態度だ」

訪ねてきた旦那方は黙って坐ったまま、一言も口をきかない。

〔昔の話——アチャラーナンダのタントラ修行〕

聖ラーマクリシュナ「私のは子供の態度だ。アチャラーナンダは此処へよく来て泊まっていたよ。御神酒おみきをしこたま飲んだものさ。わたしの子供の態度マッをきいても、ガンとして自分の言い分をゆ

ずらなかつた。しまいには、『あんたはどうして、女性に対する、勇者の態度、の修行を認めないのかね？ シヴァの方式を認めないのかね？ シヴァがタントラを創始されて、その中にいろんな態度の修行方式があるのだ。、勇者の態度、をとる修行もあるんだよ』

わたしは答えたよ——『そんなこと、誰が知るものか。わたしはそんなのはどれも大嫌いだよ。——わたしは子供の態度だ』と』

〔父親の義務——神通力と五種秘行などの批難〕

「アチャラーナンダは自分の子供たちを養っていない。わたしにこう言つたよ。『子供は神様が見て下さる——これも皆、神の思召しだ』わたしはこれを聞いて黙っていた。子供は誰が養うのだろう？ 子供や女房を捨てたのが、金を稼ぐための言い訳にならないければいいが……。人は、この人がすべてを捨離しなすつた偉いお方だと思つて、金をたくさん喜捨するだろう。

訴訟に勝ちたい、金を沢山儲けたい、世間で成功したい——このための修行なのか？ これは浅ましくも低級なことだ。

金で食べるものを買う。住む処を手に入れる。神さまを祀つたり修行者や信者たちの世話をする。貧乏な人に出会つたら助けてあげる。こういうことはみな、金の善い使い方だ。権力や地位を獲得するためや、わが身の快樂を追うために金は使うものじゃないよ。

超自然能力を持ちたいために、五種秘行（^{パンチヤカウ}五摩字）のような密教的修行をする人がいる。何という浅

ましいことだ！ クリシユナはアルジュナにこうおっしゃった。「弟よ、八大通力のうち一つでも獲得したら、僅かばかりのお前の力が増えるかもしれないが——しかし、わたし(神)のところへ来ることはできない」神通力なぞ持ち歩いていると、迷い^{マヤ}から脱けられないよ。——迷い^{マヤ}から我執^{アノカマ}が深まるばかりだ。浅ましいことだ！ 女性の性器に酒を三滴垂^たらしてそれを飲んだからといって、それがどうしたと言うんだ？ それで神通力を得て、訴訟に勝つくらいのものだ！」(訳註、八大通力——一八八三年六月十七日のコタムリト参照)

〔長寿のためのハタヨーガなど何の必要があるか〕

「肉体や金はみんな、この世かぎりのはかないものだ。こんなもののために、何であんなに無駄な苦勞をするのかなあ？ ハタヨーガの行者たちの有様を見たことがあるかい？ 体をどうやって長持ちさせようかと、それだけが目的なんだ。神さまの方なんか見向きもしない。曲げて、洗って——ただ、ただ、胃や腸を熱心に洗っていらっしゃる！ わざわざ管を使って、性器からミルクを吸い込んでいらっしゃる！」

一人の金細工師の舌がまくれ上がって上あごにくっついてしまった。ちようどジャダ^{サマデー}三昧(ジャダは無感覺の意味、無分別^{ニルグイカル}三昧とも言う)に入つたような様子になった——ぜんぜん動かないんだ。何日もその有様でいたら、大勢人がやってきて拌むようになった。何年か経つて、とつぜん舌が元通りになった。そして、前と同じようにものを考えるようになり、また金細工の仕事をし始めたとき！ (一同笑う)

ああいうのは皆、肉体からだに関係したことで、およそ神様とは何の関係もない。シヤラグラムの兄兄（息子のヴァンシヤローチャンは商売をしていた）は八十二種類の坐法アーサナを知っていて、ヨーガ三昧サーマイデーの話を年中聞かせていた！ だが、心の中は女と金のことではいっばい。ある場所で幾千ルピーものお札を見つけて、欲に目が眩くらんでそいつを呑み込んだ——あとで吐き戻せばいくらかは形があつて使えるところだ。しかし、お札の帳尻は合った。そして、三年ほど牢屋にぶち込まれたというわけだ。わたしはその時には、その人が本当に進歩した人だと思つていたんだがね——神かけて言うがね！」

〔 以前の話——マヘンドラ・パルの金を戻すこと——油売りの女バガヴァティー——女といっしょに修行するカルタバジャ派の修行への批難 〕

「ここにシンティのマヘンドラ・パルがきて、五ルピー置いていった——ラームラルのところに。彼が帰ってから、ラームラルはわたしに知らせたんだよ。わたしが、『どうしてくれていったのさ？』と聞いたらラームラルは、『この御用に立てて下さるようにと、置いていきました』と言う。そのとき、ふと思つた——『そうだ、ミルク代の借りが残っている。それでいくらか払えるだろう』と。ところがまあ、その夜寝ていたらとつぜん飛び起きたよ。だつて、胸の中をネコが引つ掻き回しているようなんだもの。起きてラームラルのところへ行つてまた聞いた。『誰につて、置いていったんだ？』 お前の叔母おばさん（サーラター・デーヴィーのこと）にじゃないのかい？』と。ラームラルはまた、『いえ、あなた様にと、置いていったのです』と言う。そこで、『すぐ行つて、その金を返してきてくれ。』

そうでないよ、わたしの気が休まないから』と頼んだよ。

ラームラルが翌朝早く金を返してきてくれたら、わたしはすっかり落ち着いた。

郷里クニにバガヴァティーと言う女の油商人がいて、カルタバジャ派(ヴィシユヌ派の一分派)の信者だった。その女は男といっしょに修行していた。そこでは、女は男がいなくて修行サトゲも讃歌バシヤンも出来ない。そういう男をラーガ・クリシユナ(愛の理想クリシユナ)と言うがね。その男が三度、クリシユナを得ることが出来たか? と聞くんだよ。女は三度、はい、得ましたと答える。

その女、バガヴァティーは賤民シュユトで油商人のカーストだった。みんなは彼女のところへ行つて、足の塵をいただいて礼拝していた。地主はそれを腹立たしく思っていたんだ——わたしも見たがね。邪なよこしま男を送つてその女をたぶらかした。そうしたら女は身ごもってしまったんだよ。

ある日のこと、一人の金持ちがやつてきた。そしてわたしに言うには、『先生、私が訴訟に勝つように、あなた様のお力を使つていただきたいのです。あなた様の評判を聞いてまいりました』わたしは、『あんた、それはわたしのことじゃない、聞き違いでしょう。それはアチャラーナンダのことだと返事したよ。』

ほんとに神様を信じている人は、肉体からだや金のことでは気を遣つかわない。肉体の楽しみのためや、人に尊敬されるためや、金のために、何で苦行や称名をするものか。こんなものは無常で、ホンの二日か三日だけのものだと考えているんだよ』

訪ねてきた旦那方は、今度はさすがに居たたまれず立ち上がって挨拶をし、『では、おいとまいた

します』と言って出て行った。タクール、聖ラーマクリシユナは微笑して、校長の方を向いておっしゃる——「泥棒に法話は無用だよ」（一同笑う）

自己への信念こそ信仰の基本

聖ラーマクリシユナ、モニに向かってニコニコしながらおっしゃる。

「え？ どうだい、ナレンドラは！」

モニ「はあ、全くすばらしい人です」

聖ラーマクリシユナ「ご覧、あの学識もだが、あの知性を！ それに歌も演奏もうまい。そのうえ性欲までちゃんと克服していてね、結婚はしないと云っているんだよ！」

モニ「あなた様がおっしゃいますように、心の中で罪のことばかり考えていると、ほんとに罪人になってしまいます。決して向上できません。私は神の子だ——この信念を持っている人は進歩も速やかです」

〔以前の話——クリシユナキシヨルの信念——ハラダリの父の信念〕

聖ラーマクリシユナ「そうだよ、信念だよ！ クリシユナキシヨルの信念ときたら！ いつもこう言っていたつけ——『あの御方の名を一度称えたのだ、私はもう罪と関係ない。私はすっかり清められた』とね。ハラダリがそれを聞いて、『アジャーミラでさえ、ナーラーヤナ（神）のために苦行をした。

苦行をしなくてはあの御方のお恵みはいただけないよ！ たった一ぺん、ナーラーヤナと言っただけではどうにもならんよ！」と言ったら、クリシュナキシヨルはカンカンに怒ってね！ この庭に花を摘みにきたとき、ハラダリの顔を見ようともしなかったよ！

ハラダリの父親は大そう信仰篤い人だった。沐浴のとき腰まで水に浸かってマントラを唱えて——ラクタヴァアルナム、チャトウルムカム(赤い色で四面の顔)などと唱えながら瞑想していたが——そのときは随喜プレドの涙を流していたよ。

ある日のこと、エンレダ(アーリアダハ)の沐浴場に一人の聖者サトドクがきていた。わたしたちも会いに行つてみようという話になった。するとハラダリは、『五元素でできた軀さや(肉体のこと)を見に行つて何になるんだい?』と言った。あとでそれを聞いたクリシュナキシヨルは、『何！ 聖者に会うのはムダですと!? ——クリシュナの名を称えたりラーマの名を称えたりすれば、人の肉体は霊体になるのですぞ。そして、すべてが霊として見える——霊像、霊地です。一度クリシュナかラーマの名を称えることは、夕方の礼拝サンクタイヤを百回するより功德があるのですぞ!』と言っていた。

息子の一人が死ぬとき、今いまわの際きわにラーマの名を称えた。クリシュナキシヨルは、『おお、ラーマの名を称えたか、もう何の心配もない!』と言っていた。でも時々、声をあげて泣いていたよ。息子が死んだんだからなあ！

プリンダーヴァンに行つてとても喉のどが渴かわいたとき、前にいた靴職人(低いカースト)の男に、シヴァの名を称えさせてから水を汲くませた。——由緒正しいバラモンがその水を飲んだんだよ！ 大した信念

だ！（訳註——当時インドでは、低カーストの人間が手をふれたものを飲食するのはバラモン階級にとって大へんなタブーだった）

信じる、ということがなければ、勤行も称名も毎日の礼拝も、何の役にも立たないよ！ お前はど
う思う？」

モニ「仰せの通りでございます」

聖ラーマクリシュナ「ハハハハ……。ガンジスの沐浴場に行つてごらん。ありとあらゆる話をして
いるから！ 後家の叔母さんはこんなことをしゃべる——『奥さん、私の家じゃ、ドウルガー祭りだっ
て私がいなけりやできないんですよ。女神さまの飾り付けまで私がするんだから！ 家に婚禮でもあ
れば、これもみんな私の役目。新郎新婦の床入りの世話までですよ、奥さん！』」

モニ「はあ、でも怒つても仕方がありませんね。そういうことしか話の種がないのでしようから」
聖ラーマクリシュナ「ハツハツハツ、屋上に近い所に礼拝室を作つて、ナーラーヤナ（ヴィシュヌ神）

を祀つて、お供えものや、白檀香を焚いたり、やることはみんなする。だが、神様の話だけはしない。
さあ、今日は何の料理をつくらうか。——今日は市場にロクなものはない。——昨日のカレーは
何でうまく出来たんだろう！——あの子は私の父方のイトコです。——あーら、あんな、あの仕事、
まだ残つてるの？——今さら私のことなんか、聞かないですよ。——私のハりは、もういないのよ。

——およそ、こんな話ばかりさ。

考えてもみる、神様を祀つた部屋で礼拝のときに、こんな種類の話ばかりしているんだよ」

モニ「はあ、大方の場合はそんなふうでございませう。あなた様がおっしゃる通り、神に対して燃えるような思慕の情を抱いている人は、礼拝や勤行のようなことを長い間続けていられませんか！」

意識の形はどんなものか？ ブラフマン智の次が覚智——神のみが実在

タクルルはモニと二人きりで話をしていらつしやる。

モニ「仰せの通り、あの御方がすべてのものになつていらつしやるならば、どうしてこんなふういろいろな顕れがあるでございませうか？」

聖ラーマクリシユナ「あの御方は、あらゆる処、あらゆるものに遍在しておいでだが、力の顕れ方がいろいろ違う。ある場所には明知として、ある場所には無明無知として、ある場所には強く大きく、ある場所には弱く小さく顕れていらつしやる。ご覧、人間のなかにだつて、ペテン師や泥棒もいるし、虎みたいに恐ろしい人もいる。わたしはだから、ペテン師の神様、虎の神様と言っているんだよ」

モニ「ははははは、そうでございませうね。そういう人たちには遠く離れて挨拶しなければいけませんね。虎神様のそばにいつて抱きついたら、食べられてしまいますから」

聖ラーマクリシユナ「あの御方とあの御方の造化力——ブラフマンとシヤクティ——これ以外には何もないんだよ。ナーラダはラーマをこんなふう言つて讚えた——おおラーマよ、君はシヴァで、シーターはバガヴァティーです。君はブラフマーで、シーターはブラフマー夫人。君はインドラで、シーターはインドラ夫人。君こそナーラーヤナで、シーターはラクシユミー。男性的なものはすべて

君。女性的なものはすべてシーター」〔訳註、シーター——ラーマの妃、ジャナカ王の娘。バガヴァティー——シヴァの妃カーリー。ナーラーヤナ——ヴィシヌス神。ラクシユミー——ナーラーヤナ夫人〕

モニ「それから、霊はどういう相すがたのものでございますか？」

聖ラーマクリシユナはすこし考えていらつしやつた。やがて、ゆつくり、ゆつくり話された。

「どんなものかつて？ —— ちょうど水のようなもの——修行をしていくうちにだんだんわかつてくるよ。

お前、相すがたを信じる。ブラフマン智チに達したら、不異おなじということがわかるが——ブラフマンはたらと働はたらき（シヤクテイ）が不異おなじだということがね。火と燃える力だ。火を思えば燃える力を思わんわけにはいかないし、燃える力を思えば火を思うことになる。牛乳と牛乳の白さ。水とその冷やす力だ。

だが、ブラフマン智チのそのまた上がある。智識チニヤナの上チニヤナが覚智チニヤナだ。智慧ある人は自分の無智にも気付く。賢者ヴァシシユタは百人の息子を亡くして嘆き悲しんでいなすつた。ラクシユマナにきかれてラーマはこう答えた——『弟よ、智と無智を越えてしまえ。智を持つものは無智をも持つ。足にトゲが刺さつたら、もう一本トゲをもつてきて、そのトゲをほじくつて抜く。それがすんだら二本目のトゲも捨ててしまえ』

モニ「無智も、智慧も、二つとも捨てなければいけないのですか？」

聖ラーマクリシユナ「そうだよ。——だからこそ覚智チニヤナが必要なんだ！

わかるかい、光を知るものは闇を知る。幸福の味がわかるものは不幸の味もわかる。徳について思

うものは罪についても考える。善を思うものは悪をも思う。清浄を感じるものは不浄の感じもある。ワタシがあればアナタがある。

ウイジュニヤナ
 覚智とは、あの御方を特別よく知ることだ。木の中に火の性があるという感じ——この確信を持つことを智識ジニヤナという。その火で米を炊いて食べて栄養をとる。これを覚智ウイジュニヤナと言うんだ。神様は実在する——これを心の経験で知るのが智識。あの御方と話をしたり、あの御方と楽しんだり……。つまり、あの御方の子供になったり友だちになったり、召使いになったり恋人になったりして——これこそ、覚智というものだ。あの御方が宇宙とすべての生物になっていらっしやる。これを見抜くのが覚智というものだ。

ある一派の考え方によると、あの御方は見ることが出来ないそうだ。——いったい、誰が誰を見るというのかね。自分が自分を見るんだよ。黒い海に船が入ると戻ってこない——だから戻って報告をすることも出来ない」

モニ「あなた様のいつものお言葉のように、記念塔のつべんに登りますと、下のものにかまわなくなりませす。——立派な馬車とか馬、紳士淑女、家屋敷や門がまえ、会社や役所——こういったものに」
 聖ラーマクリシユナ「ウン。近ごろわたしはカーリー殿に行かないが、なんか間違ってるかなあ？
 ナレンドラが言ってるそうだ——あの方、まだカーリー殿に行かれるのですか、と」

モニ「はい、あなた様は日に日に新たてでございますから——いまさら、あなた様が間違いなどとおっしゃるとは、何のおつもりですか？」

聖ラーマクリシユナ「そうだ、誰かがセンにフリダイのことを言つて、『フリダイが重病ですから、あなた様、どうぞ下衣カボルを二枚と上衣ジャマを二着下さいませんか、われわれが彼のところに届けますから——』と頼んだ。センが出してくれたのはニルピーだ！ これはどういふことだろう——あんなに金があるのに！ この出し方！ どう思う？」

モニ「はい、神を知るために努力している人間には、そういう振舞いはできないはずですよ。叡知をつかむのが人生の目的である人たちには——」

聖ラーマクリシユナ「神様だけが真実で、あとのものはみな、頼りないものだよ」